

小学校

平成25年度

教育研究員研究報告書

生活・総合的な学習の時間

東京都教育委員会

目次

◆ 生活 ◆

I	研究主題設定の理由	1
II	研究のねらい	1
III	研究の仮説	1
IV	研究構想図	2
V	研究の方法	3
VI	研究の内容	3
1	基礎研究	3
	(1) 「気付き」の捉え方	(2) 「気付きの質の段階」の捉え方
	(3) 「気付きの質を高める」の捉え方	
2	調査研究	4
	(1) 調査のねらい	(2) 調査項目と内容
	(3) 調査概要	(4) 調査結果と考察
3	授業研究	6
	(1) 気付きを見取り、価値付けるための手立ての工夫	
	(2) 伝え合い交流する活動の工夫	
	(3) 指導計画における体験活動と振り返り活動の位置付けの工夫	
	(4) 実践事例	
VII	研究の成果と課題	18

◆ 総合的な学習の時間 ◆

I	研究主題設定の理由	19
II	研究のねらい	19
III	研究の仮説	19
IV	研究構想図	20
V	研究の方法	21
VI	研究の内容	21
1	基礎研究	21
	(1) 「他者と協同する」の捉え方	
	(2) 「課題を追究する」の捉え方	
	(3) 「異なる視点から考え協同的に学ぶ」の捉え方	
2	調査研究	22
	(1) 調査のねらい	(2) 調査項目と内容
	(3) 調査概要	(4) 調査結果と考察
3	授業研究	26
	(1) 意図した学習を効果的に生み出す働きかけの工夫	
	(2) 異なる視点から考えて話し合う場面の充実	
	(3) 評価の観点の設定	
	(4) 実践事例	
VII	研究の成果と課題	36

気付きの質を高めるための学習活動の工夫

I 研究主題設定の理由

現代社会では、生活が便利で豊かになった反面、人とのコミュニケーションや地域とのつながりが希薄化している。少子・高齢化や核家族化が進み、子供の生活も大きく変化する中、これまで実生活の中で培われてきた問題解決能力や判断力、他人を思いやる心などが育ちにくい状況にある。また、身近な人との関わりの中で自他のよさや成長を自覚する機会も少ない。そのような中で「自分の生活や地域を対象とし、具体的な活動や体験を通して自分との関わりで学ぶ」生活科の学習は、時代のニーズにかなったものである。

ところが、平成20年1月の中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」では、生活科の課題として、「学習活動が体験だけで終わっていることや活動や体験を通して得られた気付きを質的に高める指導が十分に行われていないこと」、さらに「表現の出来映えのみを目指す学習活動が行われる傾向があり、表現によって活動や体験を振り返り考えるといった、思考と表現の一体化という低学年の特徴を生かした指導が行われていないこと」等が指摘された。

こうした指摘を踏まえ、今回の学習指導要領の改訂では、気付きの質を高める学習活動の充実、伝え合い交流する活動の充実などが示された。

本部会が行った、教員を対象とする意識調査からも、「児童の気付きの質を高めるために、どのように働きかけをするとよいのか。」「一人ひとりの気付きをどのように共有させていくとよいのか。」等、児童の気付きの質を高める指導に困難を感じている教師の姿が浮かび上がってきた。子供が生き生きと熱中して活動や体験を行い、その中で芽生える気付きを表現することによって高めたり、素朴な気付きや感動を伴った気付きが、意味付けや価値付けされることによって、しっかりと子供の中に自信として残ったりしていくことが重要である。

そこで、本部会では、児童の気付きの質を高める具体的な指導の在り方を探ることとした。児童が自分の思いや願いをもち、熱中して活動や体験をしているときに様々な気付きが生まれる。その気付きを児童が意識したとき、気付きは確かなものになる。そのためには、学習過程における振り返りの活動を重視し、互いの気付きを交流させることで、新たな気付きへ結び付け、気付きの質を高めていくことができると考えた。

上記の理由から、本部会では研究主題を「気付きの質を高める学習活動の工夫」とし、気付きの質を高める手だてについて研究を行った。

II 研究のねらい

生活科において、気付きの質を高めることにつながる具体的な手だてを探り、それを検証授業を踏まえて提案する。

III 研究の仮説

教師が児童の気付きを見取り、それを価値付ける手だてを工夫するとともに、「伝え合い交流する活動」を工夫した学習過程を取り入れれば、児童の気付きの質が高まるであろう。

IV 研究構想図



V 研究の方法

1 基礎研究	2 調査研究	3 授業研究
○気付きの質に関する基礎的研究 「気付き」に関する先行研究及び論文等の文献を参考に以下の3点を研究した。 1 気付き 2 気付きの質の段階 3 気付きの質を高める	○生活科の指導における課題意識についての調査 ・気付きの質が高まると考える学習活動及びその理由 ・生活科の指導における評価について	○気付きの質を高めるための指導の工夫 ・検証授業1 「めざせ 生きものはかせ」(第2学年) ・検証授業2 「かぞくにこにこ大きくせん」(第1学年)

VI 研究の内容

1 基礎研究

本部会では、次の三つの視点に着目し研究を行った。

(1) 「気付き」の捉え方

「気付き」とは、小学校学習指導要領解説生活編において、「対象に対する一人一人の認識」であり、「児童の主體的な活動によって生まれるもの」と定義されている。気付きは、知的な側面だけではなく、情意的な側面も含まれ、「対象への気付き」「自分自身への気付き」がある。気付きとは、対象との関わりなどの体験を通して、試行した中で生まれるものであり、次の自発的な活動を誘発し、児童の意欲的な姿を実現する上で大きな要因となる。

本部会では、「気付き」を「それまで気に留めていなかったところに注意が向いて、新たな発見をしたり、思いや願いをもったりすること」と捉えた。

(2) 「気付きの質の段階」の捉え方

本部会では、最初の活動後の気付きと、2回目の活動後の気付きでは、違いが生じていると考え、この違いを「気付きの質の段階」と捉えた。

平成23年度教育研究員報告書によると、気付きの質の段階には、①感覚的な気付き（特に意識しなくても得られる気付き）②発見的な気付き（活動を通して得られる気付き）③思考的な気付き（活動を通して、今までの気付きを結び付けて得られる新たな気付き）④再認識の気付き（活動を通して、改めて実感できる気付き）⑤生活に生かす気付き（活動を振り返って、意欲的に自分の生活に生かそうとする気付き）がある。この5つの気付きがスパイラルになることで、気付きの質が高まるとされている。

本部会では、気付きの質の段階を次のような具体的な児童の姿として考えた。

気付きの質の段階	具体的な児童の姿
① 感覚的な気付き	「ウサギはかわいいな。」「触ってみたいな。」
② 発見的な気付き	「ウサギの毛はふわふわしている。」「抱っこしたら温かった。」
③ 思考的な気付き	「キャベツをあげたら元気になった。キャベツが好きなのかな。」
④ 再認識の気付き	「毎日掃除をすることで、元気に過ごすことができるんだ。」
⑤ 生活に生かす気付き	「ウサギが元気に暮らせるように、これからもお世話したいな。」

(3) 「気づきの質を高める」の捉え方

「気づきの質を高める」とは、「気づきを自覚することで明確化し、その気づきを基に、新たな気づきへと高める」ことと捉えた。「気づきの明確化」とは、活動の中で生まれた無自覚な気づきを、絵や文などで表現したり、友達と交流したりすることで自覚することと考えた。気づきの明確化と同時に気づきの質が高まる場合もあれば、明確化された気づきを基に活動や表現をすることで、新たな気づきへと高まる場合もある。

本部会では、気づきの質の高まりを次のような具体的な児童の姿として捉えた。

- ① 素朴な気づきから、知的な気づきへ
「葉っぱがきれいだな。」から、「緑だった葉っぱが秋になって黄色に変わったな。」
- ② 自分だけの気づきから、一般的な気づきへ
「僕のコオロギは暗いところが好きみたいだ。」から「みんなの飼っているコオロギも暗いところが好きみたいだ。」
- ③ 一時的な気づきから、つながりのある気づきへ
「青いアサガオの花が、午後に紫色になった。」から「毎日同じように色が変わるな。」
- ④ 表面的な気づきから、内面的な気づきへ
「背がこんなに伸びたよ。」から「年下の子に優しくお世話ができるようになったよ。」

2 調査研究

(1) 調査のねらい

本研究会では、部員の所属校における教員を対象に「気づきの質を高める学習活動に関する実態調査」を実施した。教員が、生活科の指導における評価についてどのような意識をもっているかを調査することを通して、本研究の視点や具体的な手だてをつかむことをねらいとしている。

(2) 調査項目と内容

生活科の時間の展開の中で、気づきの質が高まる学習活動として、以下の4点を挙げ、特にどの活動で気づきの質が高まると考えるか、またその理由、さらに、生活科の指導における評価について、どのような意識をもっているかを調査した。

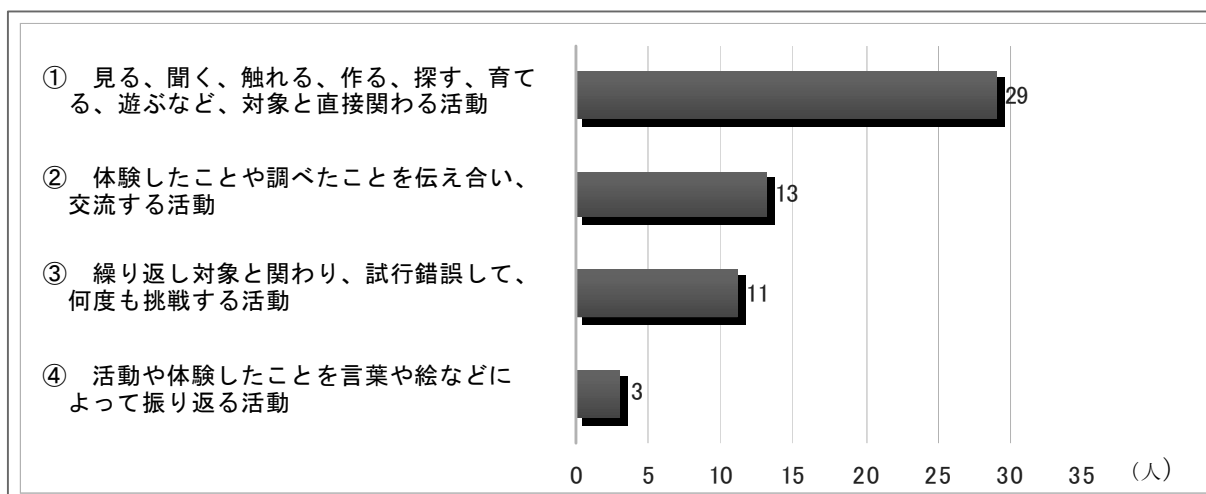
- 見る、聞く、触れる、作る、探す、育てる、遊ぶなど、対象と直接関わる活動
- 体験したことや調べたことを伝え合い、交流する活動
- 繰り返し対象と関わり、試行錯誤をして、何度も挑戦する活動
- 活動や体験したことを言葉や絵などによって振り返る活動

(3) 調査概要

調査期間	平成25年10月から11月まで
調査対象	都内小学校7校の教員（本部会部員所属校）
調査方法	質問紙による選択技法及び自由記述
サンプル数	56名

(4) 調査結果と考察

質問1 生活科の学習において、特にどの活動で気付きの質が高まると感じているか。
(当てはまるものを1つ選択)



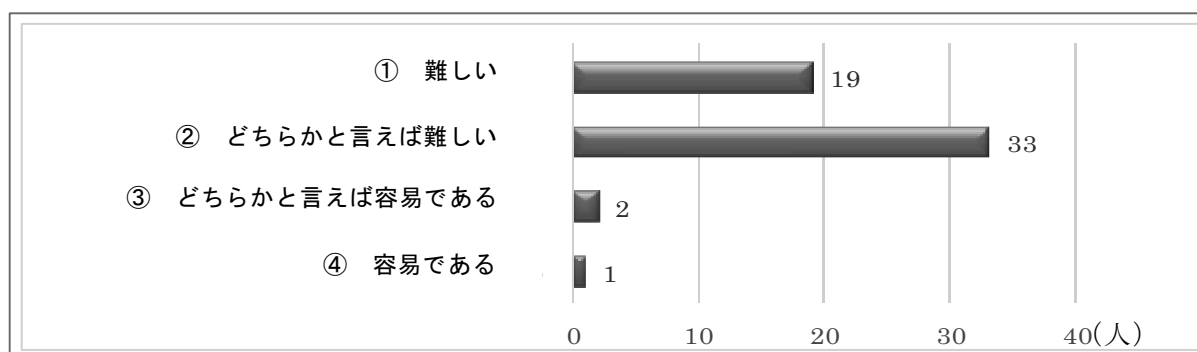
グラフ1 気付きの質が高まると感じる学習活動

質問2 質問1で回答した活動について、気付きの質が高まると感じる理由 (自由記述)

- 対象と直接関わる活動がその子供にとって自分の体験となった時、「振り返る活動」「交流する活動」「試行錯誤する活動」へと発展していくものだと思うから。
- テレビやパソコン等による情報過多の中、子供たちに不足しているのは様々な対象に直接関わることだと思う。しかし、ただ関わらせても気付けないので、それを価値付ける活動が必要である。
- 実際に活動したり、体験したりすることで、児童の気付きが多くなるのではないかと考えるから。
- 気付けるような視点を指導者がいくつかもち、アドバイスすることにより、活動の質が高まり、気付きの質も高まると思うから。

表1 「見る、聞く、触れる、作る、探す、育てる、遊ぶなど、対象と直接関わる活動」が気付きの質を高めると感じる理由

質問3 生活科において、児童にどのような力が付いたかを適切に評価することについて、どのような意識をもっているか。(当てはまるものを1つ選択)



グラフ2 評価に関する意識

グラフ1から、多くの教員が「対象と直接関わる活動」を気付きの質が高まる学習活動として挙げていることが分かった。生活経験の少ない児童にとって、対象と直接関わることで気付きを生み出していくと考えていることが分かる。

また、表1からは、ただ対象と直接関わるだけの活動にならないよう、気付きを生み出し価値付けるような活動が必要であるという結果も得ることができた。対象と直接関わることで、気付きが生まれる。その気付きを高めるために、伝え合い交流する活動、言葉や絵などで振り返る活動、繰り返し対象と関わる活動などの中で気付きを価値付けていくことが重要であると考えられる。このことから、それぞれの活動が作用し合うような指導の工夫を研究し提示していくことが、気付きの質を高めることにつながると考える。

グラフ2から、多くの教員が生活科の評価を難しいと感じていることが分かる。特に気付きをどのように見取るかを課題に挙げている教員が多かった。そのため、気付きを見取り価値付ける指導の工夫を研究し提示することは、非常に有効であると考えられる。

3 授業研究

本部会では、児童が気付きの質を高めるために、以下の3つの観点に着目し、これらを実践する際の工夫について研究を行った。

- ①気付きを見取り、価値付けるための手だての工夫
- ②伝え合い交流する活動の工夫
- ③指導計画における体験活動と振り返りの活動の位置付けの工夫

(1) 気付きを見取り、価値付けるための手だての工夫

児童の気付きを見取るために、活動や体験の中で児童とのやりとりを増やし、表情やつぶやきや動きを記録したり、絵や文字で表現したカードを読み取ったりすることが大切である。見取りの視点としては、気付きの内容(人の知恵や工夫、動物の食べ物とすみかの関係など)、方法の工夫(インタビューしている、細かく見ている、前と比べているなど)、心情(意欲的に見付けている、友達のよさを認めているなど)などが考えられる。

また、児童が自分の気付きを自覚し、広げたり深めたりできるように、そして、周りの児童に気付きの素晴らしさを知らせることができるよう、教師が価値付けや方向付ける働き掛けを積極的に行うことも重要である。活動の場では、もう一度言わせることで、よい気付きだということ価値付けた。伝え合いの場では、気付きを発表させることで、着眼点のよさをみんなに知らせるなどの働き掛けを工夫した。

価値付けの例	方向付けの例
○賞賛 (よくできたね。)	○意味付け (それを～と言うのだよ。)
○受容 (よい発見だね。)	○示唆 (～したらどうかな。)(～さんに聞いてみたら。)
○共感 (先生もそう思うよ。)	○疑問 (どうしてそう思うの。)
○納得 (なるほど。)	○揺さぶり (～でいいのかな。)
○驚き (すごいね。)	○比較 (～さんと同じかもしれないよ。)

(2) 伝え合い交流する活動の工夫

伝え合い交流する活動とは、自分自身で体験したり活動したりして、感じたことや気付いたり分かったりしたこと、考えたこと、もっと知りたいと思ったことなどを相手と交流し、伝え合うといった双方向性のある活動のことである。この活動では、対象を見たり触れたりしながら互いに話し掛けるなど、言葉を中心にした伝え合う活動が行われるが、表情やしぐさ、態度といった言葉によらない部分も大切にされなければならない。伝え合い交流する活動を工夫することによって、集団としての考えと個としての考えを結び付けることができるのである。

伝え合い交流する活動の充実には、思考を整理し気付きを明確にする学習カードの工夫が大切である。例えば、学習カードに一人一人の気付きを記入する欄と、伝え合い後の気付きを記入する欄を作る。このように自分の考えの変容を記録し、思考を整理することで、自信をもって伝え合うことにつながり、伝え合い後の新たな気付きも明確にすることができると思う。

活動場面に応じた表現方法を選択できるように働き掛けをする必要もある。分かりやすく伝えられるよう表現方法を選び、友達がうなずいて聞いてくれたり、質問をしてくれたりすることで、伝える喜びを味わうことができるからである。表現方法は、言葉によるもの、絵や文字によるもの(カード、ペープサート、紙芝居、新聞、クイズなど)、物を見せるもの(実物、写真、実演など)、身体表現を合わせたもの(劇化など)が考えられる。教師が助言しながら、表現方法を選択できるようにしていく。

気付きを伝え合い交流する場の設定も大切である。学習しながら一人では気付かなかった気付きが生まれるよう、ペアやグループなどの学習形態を工夫し、話しやすい環境をつくる。例えば、野菜の栽培活動において、同じ種類の野菜を育てているグループ同士、困ったことやうまくいったことを伝え合い交流する場を設定し活動する中で、互いにアドバイスする姿が見られ、新たな気付きを生み出すことができた。全体で互いの気付きや思いを伝え合い交流する場の設定も重要である。個人の振り返りの活動を行った後に、自分と友達の気付きの共通点や相違点、さらに工夫できる点などについて伝え合い交流することで、一人ひとりの気付きを全員で共有し、気付きの質を高めていくことができると考えた。

(3) 指導計画における体験活動と振り返り活動の位置付けの工夫

十分な体験活動により、気付きが生まれる。振り返りの活動の中で、見付ける、比べる、例える等の多様な学習活動を行いながら、気付きを比較したり、分類したり、関連付けたりして考えることを通して、気付きの質が高まっていく。そこで、本部会では、体験活動と振り返りの活動を繰り返すように指導計画を作成した。

活動や体験を通して生まれた気付きを言葉などによって振り返り、表現することで気付きが明確になる。また、伝え合い交流する中で自分の気付きと友達の気付きを比較し、似ているところや違うところを見付け、気付きの質を高めることができる。そこで、振り返りの活動を、「体験しながらの振り返り」「体験後のかくことによる振り返り」「伝え合い交流する振り返り」「単元の終末での振り返り」の4種類に分類して捉え、体験活動と振り返りの活動を繰り返し行うよう、指導計画の中に位置付けた。

(4) 実践事例

実践事例 1 「めざせ 生きものはかせ」(第2学年)

1 単元名 「めざせ 生きものはかせ」

2 単元の目標

- 虫などの生き物を育て、それらの育つ場所、変化や成長の様子に関心をもつ。
- 虫などの生き物は生命をもち、成長していることに気付く。
- 生き物への親しみをもち、大切にすることができるようにする。

◆内容(7)

動物を飼ったり植物を育てたりして、それらの育つ場所、変化や成長の様子に関心を持ち、また、それらは生命をもっていることや成長していることに気づき、生き物への親しみをもち、大切にすることができるようにする。

◆内容(8)

自分たちの生活や地域の出来事を身近な人々と伝え合う活動を行い、身近な人々に関わることの楽しさが分かり、進んで交流することができるようにする。

3 評価規準

		生活への関心・意欲・態度	活動や体験についての思考・表現	身近な環境や自分についての気付き
単元 の 評 価 規 準		虫などの生き物が育つ場所、変化や成長の様子に関心を持ち、生き物に親しんだり、大切にしたりすることができる。	虫などの生き物を育てることについて、自分なりに考えたり、工夫したり、振り返ったりして、それを自分なりの方法で表現している。	虫などの生き物は生命をもっていることや成長していること、生き物に合った世話の仕方があること及び世話ができるようになった自分に気付いている。
	1	虫などの身近な生き物に関心をもって関わろうとしている。	自分の見付けた生き物の様子や見付けた場所について話し合うことができる。	身近にいろいろな生き物がいることに気付いている。
学習活動(小単元)における評価規準	2	採集した生き物に合ったすみかを作ろうとしている。	生き物のいた場所を観察したり、友達と話し合ったりしながら工夫してすみかを作っている。	それぞれの生き物に合ったすみかやえさがあることに気付いている。
	3	自分の育てている生き物を大切に思い、進んで世話をしようとしている。	生き物の体のつくりや動き、変化などを話し合っている。	それぞれの生き物に合った世話の大切さに気付いている。
	4	生き物について分かったことをみんなに伝えようとしている。	育ててきた生き物と自分との関わりについて、考えたり、工夫したり、振り返ったりして、それを素直に表現している。	生き物は生命をもっていることや成長していることに気付いている。 生き物への親しみが増し、上手に世話ができるようになった自分に気付いている。

4 主題に迫るための主な手だて

(1) 気付きを見取り、価値付けるための手だての工夫

児童の気付きを見取るために、見取りの視点を「気付きの内容」「方法の工夫」「心情」の3つに分け、活動中の児童の表情やつぶやき、学習カードの絵や文などの表現を読み取る際の基準とした。

気付きの内容	方法の工夫	心情
<ul style="list-style-type: none"> ・身近にいろいろな生き物がいることに気付いている。 ・生き物とすみかの関係に気付いている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・他の生き物と比べている。 ・細かく観察する。 ・本で調べる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・優しく生き物に触れている。 ・生き物に毎日挨拶をしている。

また、児童の気付きを見取り価値付けるための手立てとして、教師の言葉がけを工夫した。

価値付けの観点例	方向付けの観点例
<ul style="list-style-type: none"> ・賞賛（たくさん生き物を発見したね。） ・受容（いい発見だね。） ・驚き（すごくよく観察しているね。） ・共感（先生も生き物が喜んでいると思うよ。） 	<ul style="list-style-type: none"> ・示唆（世話の仕方を友達と相談したらどうかな。） ・疑問（どうして新しい葉っぱを入れたの？） ・揺さぶり（このすみかでいいのかな。）

(2) 伝え合い交流する活動の工夫

ア 視点のもたせ方の工夫

伝え合い交流する活動において、繰り返し自分の見付けた生き物を紹介する活動を取り入れた。生き物の様子や見付けた場所を紹介して質問に答える活動を通して、自分の見付けた生き物に関心を持ち、友達の見付けた生き物と比べたり関連付けたりすることで、身近にいろいろな生き物がいることに気付くことができるようにした。

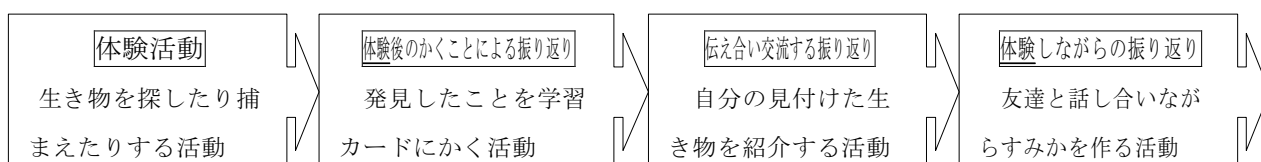
イ 学習カードの工夫

学習カードにおいて、一人ひとりの気付きを記入する欄と、伝え合い後の気付きを記入する欄を作った。このように自分の考えの変容を記録し、思考を整理することで、自信をもって伝え合うことにつながり、伝え合い後の新たな気付きも明確にすることができると考えた。

(3) 指導計画における体験活動と振り返りの活動の位置付けの工夫

指導計画における体験活動と振り返りの活動の位置付けの工夫として、振り返りの活動を「体験しながらの振り返り」「体験後のかくことによる振り返り」「伝え合い交流する振り返り」「単元の終末での振り返り」と4つに分類して捉えた。

十分な体験活動を通して気付きが生まれ、振り返りの活動を通して気付きは明確になり、気付きの質が高まっていく。本単元でも、次のように体験活動と振り返りの活動を繰り返すように指導計画を作成した。



5 指導計画（10時間）

小単元 (時数)	主な学習活動	○指導上の留意点 ◆評価規準
I いるの かな？ (3)	1 裏庭に出て生き物を探す。 2 生き物を観察し、生き物の様子やいた場所をカードに書く。 3 自分の見付けた生き物の様子や見付けた場所について紹介合う。	○ 地図を用意しておき、生き物を見付けた場所にシールを貼り、生き物と生息場所の関係について視覚的に整理できるようにしておく。 ◆ 虫などの身近な生き物に関心をもって関わろうとしている。【関①】 ◆ 自分の見付けた生き物の様子や見付けた場所について伝え合い交流することができる。【関①】 ◆ 身近にいろいろな生き物がいることに気付いている。【気①】
II すみか をつく ろう (3)	4 自分の飼いたい生き物について、生き物のいた場所を観察したり、似ている生き物同士のグループで話し合ったりしてすみかを作る。 5 生き物のことを考えてすみかが作れたか話し合い、すみかを改良する。	○ すみか作りに使えるように、必要な材料やえさを用意しておく。 ○ 生き物について調べることができるよう、図鑑や本を用意しておく。 ◆ 採集した生き物に合ったすみかを作ろうとしている。【関②】 ◆ 生き物のいた場所を観察したり、友達と話し合ったりしながら工夫してすみかを作っている。【思②】 ◆ それぞれの生き物に合ったすみかやえさがあることに気付いている。【気②】
3 ふし ぎだ な (2)	6 世話をして困ったことや、分かったことを伝え合う。 7・8 前時を踏まえて出てきた、さらに困ったことや、分かったことを伝え合いながら世話をする。	○ 似ている生き物同士のグループをつくり、困ったことや分かったことを伝え合う。 ○ 困ったことは「教えてカード」に書き、うまくいったことや、教えたことは「お知らせカード」に書くようにさせる。 ◆ 生き物の動きや変化などを話し合っている。【思③】 ◆ 自分の育てている生き物を大切に思い、進んで世話をしようとしている。【関③】 ◆ それぞれの生き物に合った世話の大切さに気付いている。【気③】
4 みんな いき ものは かせ (3)	9 これまでのカードを利用して、生き物図鑑を作る。 10 活動を振り返り、分かったことやできるようになったことを発表する。	○ 自分が世話をした生き物について、詳しく分かる図鑑になるよう言葉掛けをする。 ◆ 生き物について分かったことをみんなに伝えようとしている。【関④】 ◆ 育ててきた生き物と自分との関わりについて、考えたり、工夫したり、振り返ったりして、それを素直に表現している。【思④】 ◆ 生き物は生命をもっていることや成長していることに気付いている。【気④】 ◆ 生き物への親しみが増し、上手に世話ができるようになった自分に気付いている。【気⑤】

6 本時の指導（3/10）

（1）本時の目標

自分の見つけた生き物の様子や見つけた場所について伝え合い交流する活動を通して、身近にいろいろな生き物がいることに気付く。

（2）本時の展開

学習活動	指導上の留意点 ○教師の働きかけ◆評価（評価方法）
1 本時のめあてを知る。	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> じぶんの見つけた生きものをしょうかいしよう。 </div>	
2 生活班で、自分の見つけた生き物を紹介し合う。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> ・ 名前 ・ 生き物の様子 ・ 得意なこと など </div>	○ 紹介の仕方が分かるように、モデルを示す。 ◆ 自分の見つけた生き物の様子や見つけた場所について自分から話したり、友達の発表を聞いて質問したりしている。 【思①】（行動観察・発言）
3 どんな紹介をしたか、発表する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> わたしの見つけたバッタは、ジャンプするのが上手だよ。 </div>	○ 動作化している児童や、生き物を見せながら話している児童を紹介する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> このバッタはいつも高いところにいるんだ。すごい発見だね。友達のバッタはどうだろう？ </div>
4 一対一で自分の見つけた生き物を紹介する。	○ 二人組をつくり、互いに紹介し合う。異なるペアで紹介し合う活動を繰り返す。 ○ 自由に交流できるように、机を寄せておく。
5 紹介をして思ったことや、友達の紹介を聞いて思ったことをクラス全体で振り返る。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> ・ 今度はバッタを見つけてみたい。 ・ もう少しこのダンゴ虫と一緒にいたい。 </div>	○ 今後の活動への見通しをもたせるために、見つけた生き物をどうするのか考えさせる。
6 今日の活動で思ったことや気付いたことを振り返り、カードにかく。	○ 初めて知ったことや、意外に思ったことなど、視点をもって振り返れるようにする。 ◆ 身近にいるいろいろな生き物について、気付いたこと、発見したこと、知りたいと思ったこと、友達から学んだことを学習カードに書いている。 【気①】（行動観察・発言・学習カード）

7 検証授業を振り返って

(1) 気付きを見取り、価値付けるための手立ての工夫について

活動している最中に気付きを価値付ける言葉掛けをすることで、自分の活動を振り返り、自分の気付きに自信をもって友達に伝えることができるようになった。




(2) 伝え合い交流する活動の工夫について

○ 自分の見つけた生き物を紹介する活動を繰り返すことで、はじめは「この虫はね…」と紹介していたのが、「○○ちゃんはね。」と名前を付けて紹介するなど、愛着をもって生き物と接する姿が見られた。

○ 学習カードに活動後に思ったことや分かったことを振り返れるようにしたことで、「自分のバッタだけでなく、友達の本バッタの触覚も長いことが分かりました。」「ほかの生き物も見付けてみたいと思った。」「同じ生き物をみんなで飼ってみたいと思った。」と、書くことで気付きを明確にすることができた。

(3) 指導計画における体験活動と振り返りの活動の位置付けの工夫について

生き物と直接関わる体験活動と、振り返りの活動を繰り返すように指導計画を立てることによって、生き物と触れ合うことで生まれた一つ一つの気付きが振り返りの活動によって関連付けられた気付きへと高まった。また、振り返りの活動によって生まれた思いや願いを、生き物と直接関わる活動につなげることができた。

体験活動	振り返り	気付きの質の高まり
生き物を見付ける 	体験後のかくことによる振り返り	○ 生き物への関心 「いろいろな生き物がいるね。」 「こんどはバッタを探してみたい。」
生き物と触れ合う 	伝え合い交流する振り返り	○ 生き物への関心から愛着へ 「私が見つけたバッタは上の方に行くのが好きみたい。」 「このダンゴムシはダンちゃんっていうの。」
すみかを作る 	体験しながらの振り返り	○ 生き物のすみかと食べ物との関係 「草の中にいたから、草を食べるんじゃない？」 「ダンゴムシは石の下にいるから、石を入れてみよう。」
分かったことや困ったことを交流する	伝え合い交流する振り返り	○ 生き物の生態への関心と愛着の深まり 「バッタが元気であるように、新鮮な草を入れる。」 「ダンゴムシは、じめじめしたところが好きみたい。」

実践事例2 「かぞくにこにこ大きくせん」(第1学年)

1 単元名「かぞくにこにこ大きくせん」

本単元の実施に当たっては、児童の家庭環境に配慮するとともに、事前に保護者に主旨を説明し、協力を依頼しておくことが大切である。

2 単元の目標

家庭生活を支えている家族の大切さや役割に関心をもち、家庭で自分ができることについて考え、家族の一員として自分の役割を果たそうとすることができる。

◆内容(2)

家庭生活を支えている家族のことや自分でできることなどについて考え、自分の役割を積極的に果たすとともに、規則正しく健康に気を付けて生活することができるようにする。

◆内容(9)

自分自身の成長を振り返り、多くの人々の支えにより自分が大きくなったこと、自分でできるようになったこと、役割が増えたことなどが分かり、これまでの生活や成長を支えてくれた人々に感謝の気持ちをもつとともに、これからの成長への願いをもって、意欲的に生活することができるようにする。

3 単元の評価規準

	生活への関心・意欲・態度	活動や体験についての思考・表現	身近な環境や自分についての気付き
単元の評価規準	家庭での自分の生活に目を向け、家族と一緒に遊んだり仕事をしたりして、その楽しさを実感する。	家庭での生活がより楽しくなるように考え、家庭での仕事を分担したり、家族が喜ぶことを工夫したりして、生活することができる。	家族の支えがあって楽しい団らんがあることに気付くとともに、楽しく生活するために自分ができることに気付くことができる。
学習活動(小単元)における評価規準	1 ① 家族との触れ合いで、楽しかったことに目を向けようとしている。 ② 家族の素敵などところを見付けようとしている。	① 家族の素敵などところを見付け、表現している。	① 家族にたくさんのことをしてもらっていること(家族の思いやり・愛情)に気付いている。
	2 ③ 家族の一員として、家族がにこにこすることに目を向けようとしている。	② どうすれば家族のにこにこが増えるかを考え、計画を立てている。	② 家族一緒に仲良く過ごしたり、手伝いをしたりすることで、家族のにこにこを増やすことに気付いている。
	3 ④ 家族のよさや家庭の温かさを感じ取り、感謝の気持ちをもとうとしている。	③ 友達に分かりやすく伝えるために自分なりの工夫をして表現している。 ④ 家族ににこにこ大作戦で行ったことを、友達に分かりやすく伝えている。	③ 家族で過ごす楽しさや手伝いをする喜びに気付いている。 ④ 家族の一員として、自分でできることを進んで行う大切さに気付いている。

4 主題に迫るための主な手だて

(1) 気付きを見取り、価値付けるための手だての工夫

見取りの視点を「気付きの内容」（自分は家族のためにできることがあるなど）、「方法の工夫」（友達との共通点や相違点を比べているなど）、「心情」（自分のよさや頑張りを認めている）の3つに分け、活動中の児童の表情やつぶやき、学習カードの絵や文などの表現を読み取る際の基準とした。

気付きの内容の例	方法の工夫の例	心情の例
<ul style="list-style-type: none"> ・自分にとって家族は大切であることに気付いている。 ・自分は家族のためにできごとがあることに気付いている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・家族の言葉や表情・様子を細かく見ている。 ・友達の作戦との共通点や相違点を比べている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分のよさや頑張りを認めている。 ・友達のよさや頑張りを認めている。

また、気付きを見取り、価値付けるための手だてとして、教師の言葉がけを工夫した。

価値付けの例	方向付けの例
<ul style="list-style-type: none"> ・賞賛（にこにこ大作戦をよく頑張りましたね。） ・受容（よいことに気付きましたね。） 	<ul style="list-style-type: none"> ・示唆（友達の作戦と比べてみたらどうかな。） ・疑問（どうして〇〇さんを優しいと思うの。）

(2) 伝え合い交流する活動の工夫

ア グループで気付きを交流する場の設定

「かぞくにこにこ大きくせん」において自分が行ったことを紹介し、質問や感想を伝え合う活動を通して、自分の活動と家族の喜びを関連付けることができると考えた。さらに、家族との手紙による交流の場を設定した。家族で過ごす楽しさや手伝いをする喜びなどの気付きが生まれると考えた。

イ 表現方法の工夫

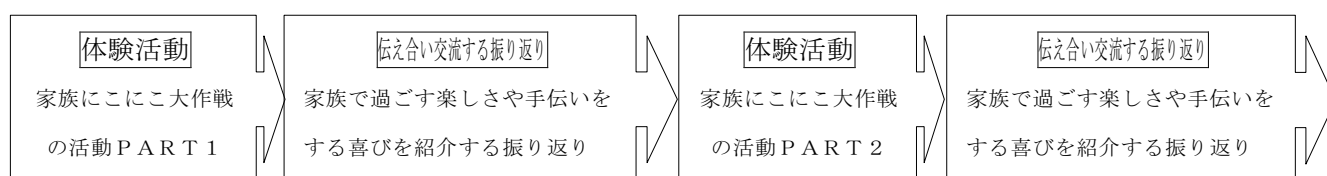
絵・クイズ・実演等、児童が自分なりの表現方法を工夫できる場を設定した。表現する楽しさを味わうことによって気付きが明確になると考えた。

ウ 学習カードの工夫

学習カードに、家族の言葉や自分が思ったこと、伝え合い後に感じたこと等を記入する欄を設けた。文章で書くことにより、自分の思考を整理することで、新たな気付きも明確にすることができると考えた。

(3) 指導計画における体験活動と振り返り活動の位置付けの工夫

十分な体験活動を通して気付きが生まれ、振り返りの活動を通して気付きは明確になり、気付きの質が高まると考え、体験活動と振り返りの活動を繰り返すように指導計画を作成した。振り返りの活動を、「体験しながらの振り返り」「体験後のかくことによる振り返り」「伝え合い交流する振り返り」「単元の終末での振り返り」の4種類に分類して捉え、体験活動と振り返りの活動を繰り返し行うよう、指導計画の中に位置付けた。



5 指導計画（11時間）

小単元 (時数)	主な学習活動	○指導上の留意点 ◆評価規準
I かぞくのすてきをみつげよう (4)	1 家族と過ごして楽しかったことを思い出す。 2 家族の素敵なところを見付ける。 3 家族の一人を紹介する。 4 家族が自分たちのためにしていることを見付ける。	◆ 家族との触れ合いで、楽しかったことに目を向けようとしている。【関①】 ○ 児童が家族を素敵と思うように、共感できそうな事例を紹介する。 ◆ 家族の素敵なところを見付けようとしている。【関②】 ◆ 家族の素敵なところを見付け、表現することができる。【思①】 ○ 家の仕事だけでなく内面的なことも考えるよう促す。 ◆ 家族にたくさんのことをしてもらっていること（家族の思いやり・愛情）に気付いている。【気①】
II かぞくのすてきをみつげよう (3)	5 家族がにこにこ（喜ぶ、楽しそうにする）するのはどんなときか考える。 6 家族がにこにこするために、家族と一緒にやってみたいことを考える。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; width: fit-content; margin: 5px 0;">家族ににこにこ大作戦1を行う。</div> 7 家族ににこにこ大作戦1を振り返り、家族ににこにこ大作戦2でやってみたいことを考える。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; width: fit-content; margin: 5px 0;">家族ににこにこ大作戦2を行う。</div>	◆ 家族の一員として、家族がにこにこすることに目を向けようとしている。【関③】 ○ 学習カードを毎日提出させ、進行状況を把握し、にこにこ大作戦を続けていく意欲を高める。 ◆ どうすれば家族のにこにこが増えるかを考え、計画を立てている。【思②】 ◆ 家族一緒に仲良く過ごしたり、手伝いをしたりすることで、家族のにこにこを増やすことができることに気付いている。【気②】
III にこにこ大さくせんを つたえよう (4)	8・9 家族と一緒にして楽しかったことなどを、発表する準備をする。 10 家族と一緒にして楽しかったことを発表する。 11 家族ににこにこ大作戦を振り返り、家の人に手紙を書く。	◆ 友達に分かりやすく伝えるための表現方法を考えることができる。【思③】 ◆ 家族ににこにこ大作戦で行ったことを、自分の選んだ表現方法で、友達に分かりやすく伝えることができる。【思④】 ◆ 家族で過ごす楽しさや手伝いをする喜びに気付いている。【気③】 ◆ 家族のよさや家庭の温かさを感じ取り、感謝の気持ちをもとうとしている。【関④】 ◆ 家族の一員として、自分でできることを進んで行う大切さに気付いている。【気④】


6 本時の指導（10／11）

（1）本時の目標

○家族にここぞ大作戦で行ったことを、友達に分かりやすく伝える。

○家族で過ごす楽しさや手伝いをする喜びに気付く。

（2）本時の展開

学 習 活 動	指導上の留意点 ○教師の働きかけ◆評価
<p>1 本時の流れとめあてを知る。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> 家族にここぞ大作戦でしたことを紹介しよう。 </div> <ul style="list-style-type: none"> ・したこと（誰と何を） ・家族の言葉や気持ち ・分かったこと、工夫したこと、頑張ったこと <p>2 グループごとに家族にここぞ大作戦で行ったことを紹介し合う。</p> <p>3 紹介後に、思ったことを全体で振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・友達のすごいと思ったこと ・自分もやりたいと思った作戦と理由 ・家族はいいなと思ったこと など <p>4 家族からの手紙を読み、ペアで感想を発表する。</p> 	<p>○本時の見通しがもてるようにする。</p> <p>○ 紹介後に気付いてほしい視点を示しておく。 ◆ 家族にここぞ大作戦で行ったことを、友達に分かりやすく伝えている。【思④】</p> <p>○ 取り組んだ頑張りを認めたり、よい気付きを価値付けたりする等の働きかけをする。</p> <p>○ 保護者に事前に依頼して集めておいた手紙を配る。</p> <p>○ 家族の思いに対する自分の気持ちを引き出すようにする。 ◆ 家族で過ごす楽しさや手伝いをする喜び、家族への思いについて、ワークシートに記述している。【気③】</p>

7 実践を振り返って

(1) 気付きを見取り、価値付けるための手立ての工夫について

活動中の児童の表情やつぶやき、学習カードの絵や文から児童の気付きを見取り価値付けることで、自分の気付きに自信をもって友達に伝えることができた。

「よいことに気付きましたね。」と言われ、大作戦に対するやる気をもっと出た。

(2) 伝え合い交流する活動の工夫について

- 「家族にこにこ大作戦」後に、ペア・グループ・全体で気付きを交流する場を設定することにより、自分が行ったことを紹介し質問に答えたりや感想を伝え合ったりすることで、自分の活動と家族の喜びを関連付けることができた。



自分が頑張れば頑張るほど、家族がにこにこすることが分かった。

- 家族との手紙の交流により、家族で過ごす楽しさや手伝いをする喜びなどの気付きが生まれた。



いつもありがとう。大作戦をやってから家の中がにこにこ輝いている気がするね。またお手伝いするね。私は家族が大好き。

- 絵・クイズ・実演など自分なりの表現方法を工夫し、表現する楽しさを味わうことにより、気付きが明確になった。
- 学習カードに、体験活動後に自分が思ったことや伝え合い後に感じたことを記入する欄を設けることにより、児童が自分の思考を整理することができた。自信をもって伝え合うことにつながったことで、新たな気付きも明確にすることができた。



家族のにこにこのために、これからも頑張ろうという〇〇さんは、すごい。

(3) 指導計画における体験活動と振り返り活動の位置付けの工夫について

家族がにこにこするためにやってみたいことを体験する活動と、振り返りの活動を繰り返すように指導計画を立てた。体験活動で生まれた一つ一つの気付きが、振り返りの活動によって関連付けられた気付きへと高まった。また、振り返りの活動によって生まれた思いや願いを、次の体験活動につなげることができた。

体験活動で生まれた気付き	振り返りの活動によって関連付けられた気付き	
対象への気付き	自分自身への気付き	友達のよさへの気付き
<ul style="list-style-type: none"> ○家族と遊んで楽しかった。 ○洗濯物たたみを頑張った。 ○掃除をしてスッキリした。 	<ul style="list-style-type: none"> ○家族が喜ぶと自分もうれしい。 ○自分にとって家族は大切だ。 ○家族一緒に何かすると楽しい。 ○家族のためにこれからも手伝いをしたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ○◆◆さんは弟や妹の世話をして優しい。 ○■■さんは、お風呂掃除ができてすごい。 ○★★さんの言葉は立派だ。

VII 研究の成果と課題

1 研究の成果

(1) 基礎研究

ア 「気付き」とは、「それまで気に留めていなかったところに注意が向いて、新たな発見をしたり、思いや願いをもったりすること」と捉えた。気付きは、次の自発的な活動を誘発し、児童の意欲的な姿を実現する上で大きな要因になると捉えることができた。

イ 「気付きの質の段階」とは、最初の活動後の気付きと、2回目の活動後の気付きの違いであると捉えた。気付きの質は活動を振り返ったり、繰り返したりする中で高まっていくと捉えることができた。

ウ 「気付きの質を高める」とは、「気付きを自覚することで明確化し、その気付きを基に、新たな気付きへと高める」ことと捉えた。気付きの質を高めるためには、気付きを明確化することが必要であり、そのために、気付きを絵や言葉などで表現し、伝え合うことで自覚することが重要であると考えることができた。

(2) 調査研究

アンケート調査の結果から、半数以上の教師が対象と直接関わる活動によって気付きの質が高まると感じていることが分かった。しかし、ただ対象と直接関わるだけの活動にならないよう、気付きを生み出し、価値付けるような活動が必要であるという結果も得ることができた。

(3) 授業研究

ア 活動中の児童の表情やつぶやき、学習カードの絵や文から児童の気付きを見取り価値付けることで、自分の気付きに自信をもって友達に伝えることができた。

イ 体験活動後に思ったことと伝え合い後に分かったことを振り返ることのできる学習カードにしたことで、伝え合い後の新たな気付きも明確化することができた。

個々の体験活動を共有する場を設定することにより、気付きを自覚し、次の活動への意欲が高まった。

ウ 体験活動と振り返りの活動を繰り返すことで、気付きの質を高めることができた。体験活動と振り返りの活動を繰り返すことで、「自分にとって家族は大切だ。」「ダンゴムシは石の下にいるから、飼育箱に石を入れよう。」のように、気付きの質を高めることができた。

2 今後の課題

体験活動と振り返りの活動を繰り返すことで気付きの質は高まっていく。気付きの質が段階を追って高まるとともに、教師の価値付けの技能も高まるようにしていくことが必要である。気付きの質の段階を見取るために、各単元での具体的な児童の姿をイメージできるよう検討していく。

児童一人一人が没頭し、熱中できるような直接体験と、繰り返し試行錯誤する活動によって、さらに気付きは高まる。豊かな体験活動と繰り返し試行錯誤する活動を十分に保証できるような指導計画の在り方を探る必要がある。

今後は、この研究の成果を自身のこれからの授業づくりに生かすとともに、自校における生活科のさらなる充実のために、自身に何ができるかを考え、取り組んでいく。

< 総合的な学習の時間・研究主題 >

他者と協同して課題を追究する学習活動の工夫 ～異なる視点から考える場面を通して～

I 研究主題設定の理由

グローバル化や情報化の進展等により、世界全体が急速に変化する中で、様々な課題が山積している。しかし、それらの解決に向けた一律の答えは存在しない。このような社会状況の中では、一人一人が当事者意識をもって行動していただくだけではなく、課題の解決に向けて、様々な価値観や考えをもった他者と話し合い、力を合わせて困難な時代を乗り越えていく力が求められる。

学習指導要領の総合的な学習の時間においては、他者と協同して課題を追究する学習活動を重視するように示されている。そのため、現在各学校で行われている授業では、調べてきたことを発表し合って情報交換したり、グループ等で協力して活動したりする場面が多く設定されている。しかし、そのような授業の中で、児童自らが考え、意欲的に学習を進める姿は必ずしも多く見られていない。つまり、他者と協同して課題を追究する場面は多く設定されているものの、その成果が十分発揮されていないと考えられる。

そこで、本研究では、研究主題を「他者と協同して課題を追究する学習活動の工夫」と設定した。また、他者と協同して課題を追究する学習活動の中でも、特に、異なる視点から考える場面に着目した。児童が異なる視点から考えられるように、教師は事前準備及び授業における児童への働きかけを工夫したり、話し合う場面の環境構成や話し合う方法を充実させたりすることが有効であると考え、その具体的な指導方法を検証し、提案することとした。

他者と協同して課題を追究する学習活動において、児童は、異なる視点から考えることを通して、児童一人では気付かなかったことに出会い、驚いたり、刺激を受けたりする。「もっと調べて確かめたい。」「次の課題が見つかった。」等、課題を追究しようとする意欲を高めたり、課題を新たに更新したりして探究的な学習にのめり込んでいくのではないかと考えた。

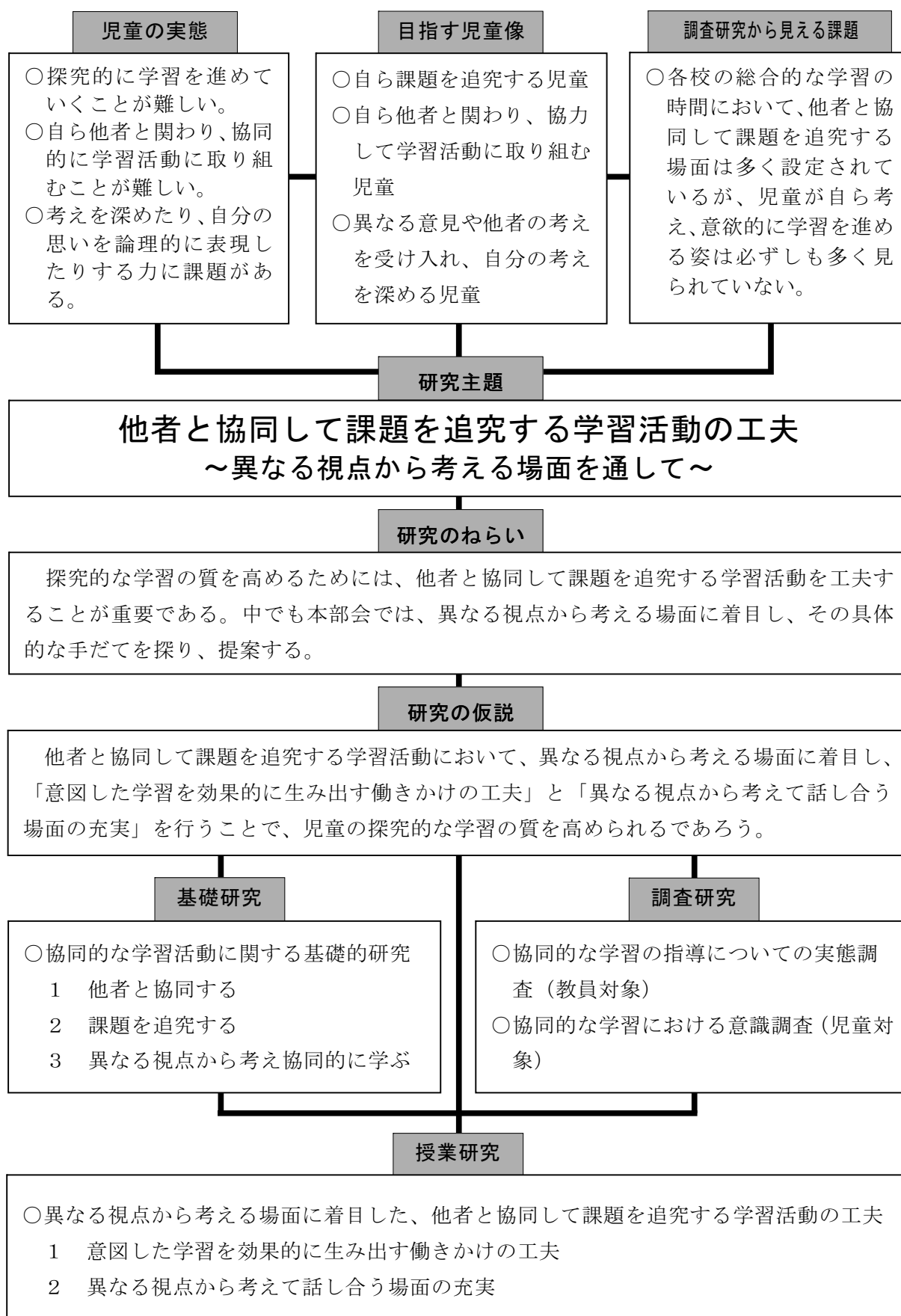
II 研究のねらい

探究的な学習の質を高めるためには、他者と協同して課題を追究する学習活動を工夫することが重要である。中でも本部会では、異なる視点から考える場面に着目し、その具体的な手だてを探り、提案する。

III 研究の仮説

他者と協同して課題を追究する学習活動において、児童が異なる視点から考えられるように、意図した学習を効果的に生み出すための働きかけを工夫したり、異なる視点から考えて話し合う場面を充実させたりすることで、児童の探究的な学習の質を高められるであろう。

IV 研究構想図



V 研究の方法

1 基礎研究	2 調査研究	3 授業研究
○研究主題に関する基礎研究 1 「他者と協同する」の捉え方 2 「課題を追究する」の捉え方 3 「異なる視点から考え、協同的に学ぶ」の捉え方	○協同的な学習の指導についての意識調査（教員対象） ○協同的な学習に関する意識調査（児童対象）	○異なる視点から考える場面に着目した、他者と協同して課題を追究する学習活動の工夫 1 意図した学習を効果的に生み出す働き掛けの工夫 2 異なる視点から考えて話し合う場面の工夫

VI 研究の内容

1 基礎研究

本部会では、次の3つの視点に着目して研究を行った。

(1) 「他者と協同する」の捉え方

「他者と協同する」とは、学級・学年の児童同士の意見交換や互いに教え合い学び合う活動、異なる学年の児童や地域の方、専門家等の協力を得ながら取り組む活動や交流活動などを通して課題を解決しようとするものであると捉えた。

学習指導要領解説では「協同的な学習活動」において大切なこととして以下の2点を挙げている。

- ① お互いに考えや意見を出し合い、見通しや計画を確かめ合い、他の考えを受け入れながら、問題の解決や探究活動を協同して行う学習経験を積み重ねること
- ② 身近な人々や社会、自然の問題について、児童だけでは解決できない課題を見出した時、他者と協同して解決しようとする活動に発展させていくこと

「他者と協同する」の「他者」とは、①においては、主に学級・学年の児童、②においては、異なる学年の児童、地域の方や専門家等であると考えた。

「協同する」活動としては、問題の解決に向けて協力して多様な情報を収集・整理・分析し、活用すること、他の考えを受け入れて異なる視点から考え、検討すること、異なる学年の児童や地域の方や専門家等と力を合わせたり交流したりすること等が挙げられる。

これらの活動を指導計画上に意図的・計画的に位置付けることが重要であると考える。

(2) 「課題を追究する」の捉え方

「課題を追究する」とは、探究活動（課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現）の過程を大切にし、課題を更新しながら問題の解決に取り組むことであると捉えた。

学習指導要領解説編では、「基礎的・基本的な知識・技能の定着やこれらを活用する学習活動、教科で行うことを前提に、総合的な学習の時間においては、体験的な学習に配慮しつつ探究的な学習となるよう充実を図ることが求められている。」とある。ここでいう探究的な学習とは、問題解決的な活動が発展的に繰り返されているような学習活動を意味しており、総

合的な学習の時間は、体験活動だけで終わることや知識・技能を一方的に教え込むだけの学習活動ではないことが明確に示されている。以上のことから、単元全体や一単位時間の授業を考えるに当たって、課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現といった、探究的な学習の過程を常に意識し、課題の更新を繰り返しながら、探究のスパイラルが広がっていくような学習を進めていくことが重要であると考えます。

(3) 「異なる視点から考え協同的に学ぶ」の捉え方

「異なる視点から考え協同的に学ぶ」とは、異なる視点を出し合い、検討していく活動が展開されていくことを通して、事象に対する児童の考えが深まり、探究的な学習の質を高めていくことであると捉えた。

課題を追究する過程において、物事の決断や判断を迫られるような話し合いや意見交換を行うことは、収集した情報を比較したり、分類したり、関連付けたりして考えることにつながる。また、そのような場面において、異なる視点からの意見交換が行われることで、互いの考えを深めることができる。

例えば、地域のよさについて考える活動を行う際に、多様な年齢層や職業等の異なる立場の方々の意見を聞き取ったり、調べたりした上で話し合いを行うと、これまでの児童の考えにはない異なる視点からの意見が出され、互いの考えを深めることにつながっていく。

このように、異なる視点から考える場面を意図的に単元に取り入れることは、探究的な学習の質を高めていく上で効果的であると考えます。

2 調査研究

(1) 調査のねらい

本研究では、教員対象と児童対象の二つの調査を行った。

教員を対象とした調査では、教員が指導において抱える悩みの実態について把握することを通して、研究の視点をつかむことをねらいとした。また、児童を対象とした意識調査では、教師の指導と児童の姿との関係性を考察することを通して、本研究の有効性を探り、より具体的で実践的な手だてを探ることを目的とした。

本調査の実施に当たっては、総合的な学習の時間の特徴を踏まえ、より多くのデータを集計することよりも、質的に分析することを重視している。

(2) 調査項目と内容

①協同的な学習指導についての実態調査（教員対象）

教師が総合的な学習の時間を展開する上で、地域の方や専門家、児童間での協同的な活動の場（話し合い、取組等）をどのように設定しているか、児童の意欲についてどのような認識をもっているか、指導上困難と感じていることは何か、また、その理由について調査し、分析した。

②協同的な学習における意識調査（児童対象）

児童が探究活動に主体的に取り組んでいるかを見取るため、児童自身に主体的に活動している認識がどの程度あるのか、また、友達や他者と協同的に活動することの良さや価値をどの程度感じているのかについて、検証授業の実施前に児童の意識調査を行い、実態を

把握する。変容については、授業中の教師による見取り、授業後の振り返り、児童からの聞き取り等を行うことを通して、検証授業で実証、分析していくこととした。

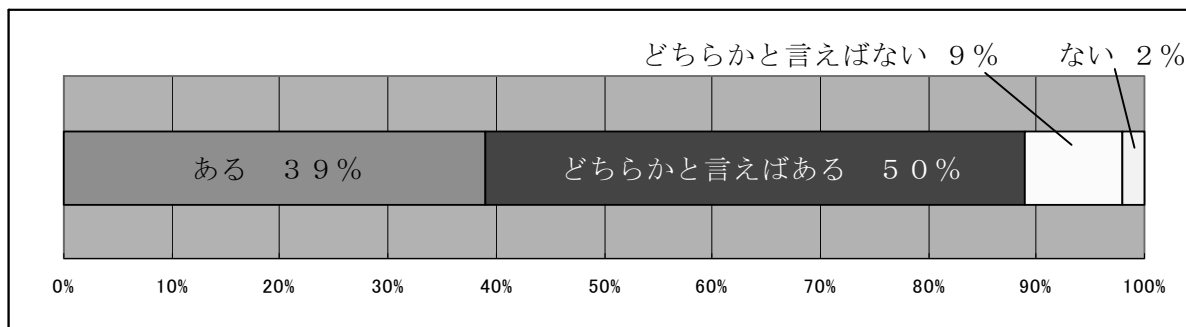
(3) 調査概要

	① 協同的な学習の指導についての 実態調査 (教員対象)	② 協同的な学習における意識調査 (児童対象)
調査期間	平成25年10月から11月	平成25年9月から12月
調査対象	都内小学校7校の教員 (本部会部員所属校)	都内小学校3校の児童 (本部会部員所属校)
調査方法	質問紙による選択技法及び自由記述	質問紙による選択技法、自由記述及び聞き取り
サンプル数	60名	116名 (第3学年33名、第4学年45名、第6学年38名)

(4) 調査結果と考察

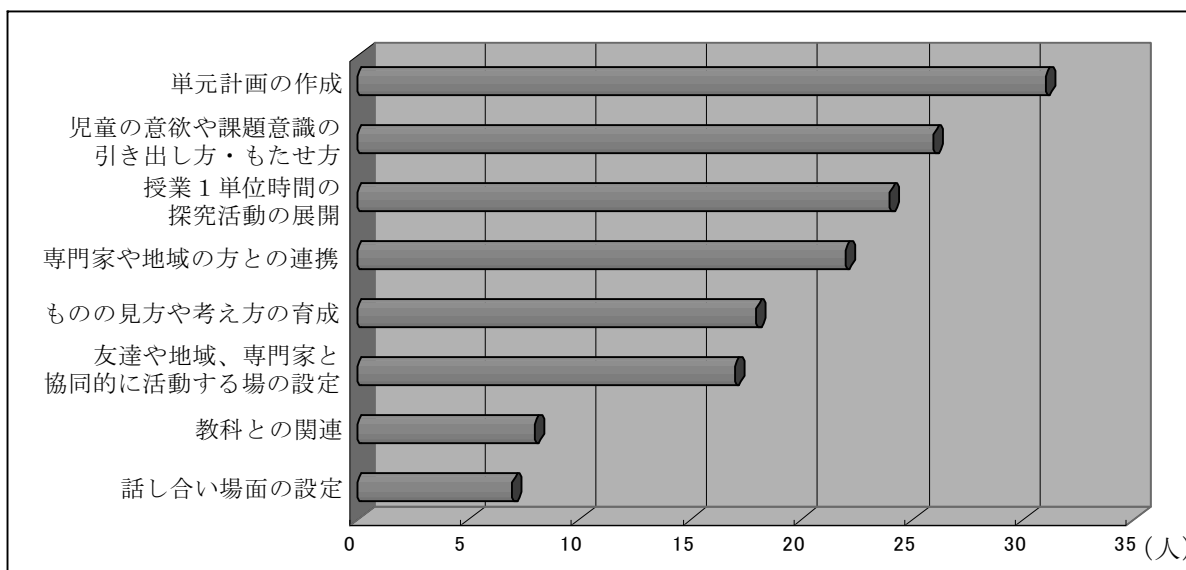
①協同的な学習の指導についての実態調査 (教員対象)

質問1 総合的な学習の時間を展開していく上で、困っていることや難しいと感じていることがあるか。



グラフ1 総合的な学習の時間の指導において難しいと感じることの有無

質問2 総合的な学習の時間を展開する上で、難しいと感じている内容は何か。(複数回答可)



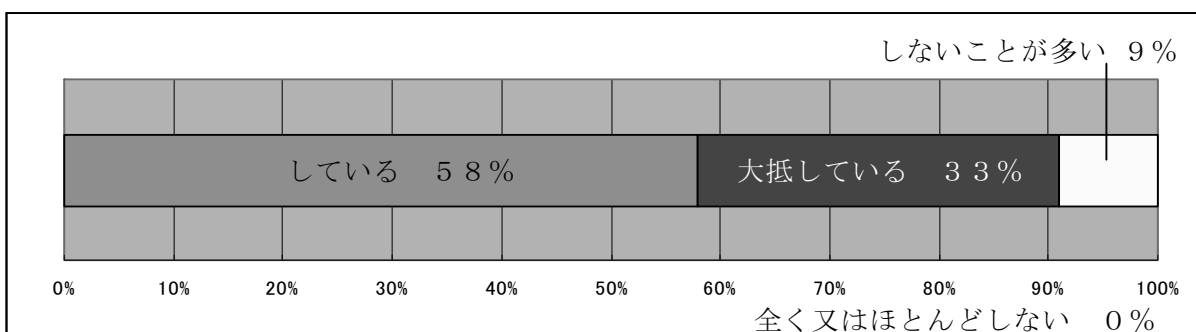
グラフ2 総合的な学習の指導において難しいと感じている内容

質問3 総合的な学習の時間の指導について、難しいと感じている理由（自由記述）

- 児童主体の探究活動にしていくことができない。活動がぶつ切れになってしまい、1つの課題で長時間取り組み、深めていくことができない。
- 児童主体の学習活動を考え、取り組んでみるが、結果的に教師主導になってしまう。
- 探究活動にするには、前もって情報収集力などを身に付けさせておく必要があり、その力をなかなか身に付けさせられないと感じている。
- 児童が意欲をもって取り組むことができるように声掛けしたり、考え方を意図的に育てていたりすることに難しさを感じている。
- 子供の具体的な学びの姿が思い浮かばない。
- 一つの課題を深く考えるように促すにはどうしたらよいか悩む。
- 教科指導で染みついた、すぐ教える癖が出てしまい、子供が力を発揮する場面を取り上げてしまう。
- 子供たちから出された問題意識で課題設定することがうまくできない。
- 校内研究等で内容と方法が確立している学校もあるが、活動ばかりが先行し、児童の力として備わっていないようなことも耳にする。よりよい総合的な学習の時間の授業を広く知らせたり、各研究会での取組を実践したりしていくことが必要である。

表1 総合的な学習の時間の指導について難しいと感じている理由

質問4 総合的な学習の時間の指導において、話し合いの場を設定していますか。



グラフ3 総合的な学習の時間における話し合いの場の設定

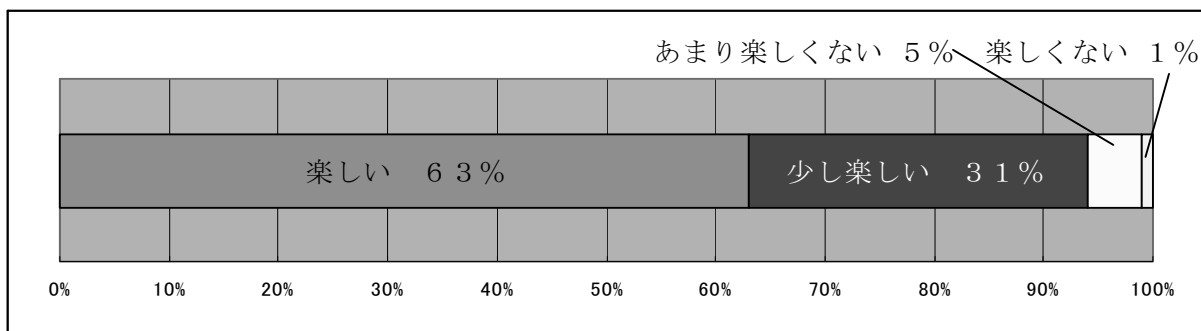
グラフ1の結果から、89%の教員が総合的な学習の時間を展開することに難しさを感じていることが分かる。その具体的な内容として、総合的な学習の時間の単元計画の作成、児童の意欲や課題意識の引き出し方・もたせ方、探究活動（課題設定・情報収集・整理分析・まとめ、表現）の授業1時間の展開の順で挙げられている（グラフ2）。

本部会で注目した協同的な学びに関する項目（話し合い場面の設定、友達や地域の方、専門家等と協同的に活動する場の設定）については、難しさを感じている教員は意外にも少ないことが分かる。

また、グラフ3の結果から、91%の教員が話し合いの場を意識的に取り入れていることが分かるが、果たして児童の確かな学びや態度、培うべき思考力、判断力、表現力が育まれ、身に付いたかと問われると、思いのほか実感している教員が少ないことが表1の内容から伺える。

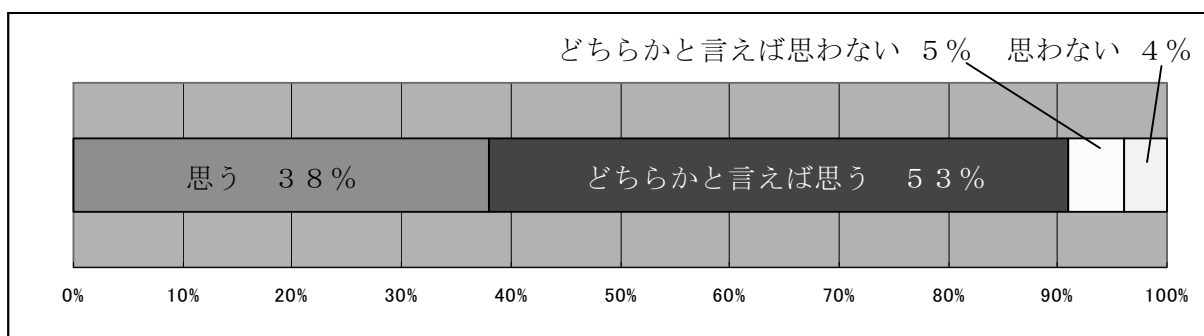
②協同的な学習に関する意識調査（児童対象）

質問1 友達や地域の方と一緒に活動することは楽しいですか。



グラフ4 協同的な学習の楽しさ

質問2 友達や地域の方と協力することによって、よいアイデアが生まれたり、よりよく問題が解決されたりしていると思いますか。



グラフ5 協同的に学ぶことのよさや価値の実感

グラフ4の結果からは、他者と協同的に学ぶことに対し、肯定的に捉えている児童は、「友達や地域の方と一緒に活動することは楽しい」、「少し楽しい」と回答した児童を合わせて、94%に上ることが分かる。さらに、グラフ5からは、協同的に学ぶことのよさや価値を感じている児童が大きな割合を占めていることが分かる。「友達や地域の方と協力することによって、よいアイデアが生まれたり、よりよく問題が解決されたりしていると思う」「どちらかと言えば思う」と回答した児童は、91%にも上る。

これらを、教員対象の調査結果と併せて鑑みると、教員が設定した話し合いの場、友達や地域の方、専門家等と協同的に活動する場が、児童の意欲や主体的な探究に必ずしもつながっていないという現状が浮かび上がってくる。教員が感じている指導上の難しさを解決していくためには、児童が実感している協同的な学びのよさや価値を生かしつつ、かつ探究的な学習に結び付ける工夫が必要である。

教員が困難と感じる「単元計画の作成」と「1単位時間の探究活動の展開」における協同的な学びの在り方を探ることは、児童の意欲を引き出し、総合的な学習の時間の基盤となる探究的な学習をより充実した学びへと高める上で大きな意義があると言える。

3 授業研究

本部会では他者と協同して課題を追究する学習活動の中でも、異なる視点から考える場面における「意図した学習を効果的に生み出す働きかけの工夫」と「異なる視点から考えて話し合う場面の充実」に着目し、これらを実践する際の指導の工夫について研究を行った。

(1) 意図した学習を効果的に生み出す働きかけの工夫

総合的な学習の時間では、児童が自ら学んでいけるように、教師は意図的に単元を構成する必要がある。中でも、他者と協同して課題を追究する学習活動を重視した単元構成を行うには、児童の関心や疑問が何かを丁寧に見取り、把握することが大切である。そこで、単元計画の中に協同的に取り組む活動を適切に配置し、児童の実態や活動の様子に応じて異なる視点から考える場面を設けるなど、児童の考えの深まりや広がりを促すことが必要である。また、児童の意識や活動の向かう方向を的確に予測し、教師が意図しない方向へ児童の興味関心が向かうことがあっても対応できるよう十分な教材研究をすることも必要である。

そこで、本部会では、児童主体の学習活動で、教師が意図する学習を効果的に生み出し、他者と協同して課題を追究するためには、次のような手だてが有効であると考えた。「意図的な働きかけ」の具体的な手だてとして3つの例を挙げる。

ア 児童の関心を惹き付けるような話題提示の工夫

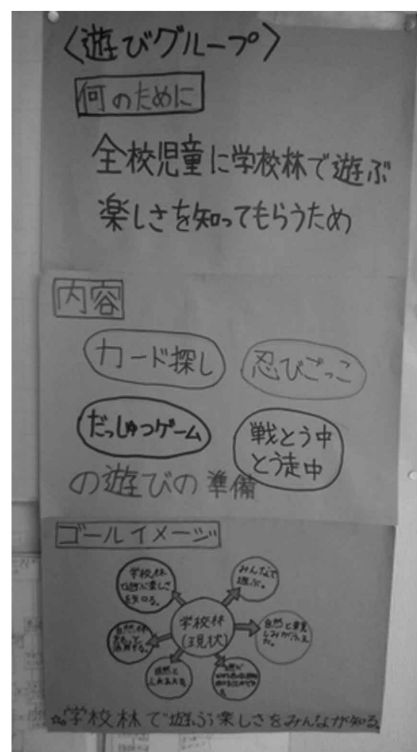
ビデオレター、手紙、メール、電話など対象に直接向き合い、児童に訴えかける方法である。例えば、ゲストティーチャーの願いや困っていることなどを手紙で児童に伝えることにより、児童に「何とかしたい!」という切実な思いを引き出すことができるのではないかと考えた。

イ ゲストティーチャー（専門家）との出会いの工夫

誰に、どのタイミングで、どのように会うのが最も効果的かを慎重に検討する。ゲストティーチャーと入念な打ち合わせを行い、ゲストティーチャーの話が児童の考えにどのような影響を与えるかを十分吟味する。例えば、児童の情報収集が偏った内容であると判断される場合、ゲストの生の声を聞く機会を設けることで、これまで自分たちが調べたり考えたりしたことを見つめ直し、新たな考えがもてるのではないかと考えた。

ウ 学習履歴の揭示の工夫

児童の学習履歴（活動時期・活動内容・活動の写真・感想・今後の予定等）を揭示する目的は、活動内容を記録するためだけではない。グループ活動では、各グループの進捗状況の把握や、集めた情報、困っていることを共有し、意見交流する際にも有効である。また、活動のゴールをイメージすることで、活動内容が明確になり、見通しをもって活動を進め



ることができる。さらに、掲示することは児童が活動意欲を高くもち続ける上からも有効である。

この他にも、学習が始まる前から行う素地づくりに有効な手だてとして、関連資料の提示がある。これは児童にできる限り多様な考えをもたせるために有効であり、児童の興味関心を引き出す一助となる。具体的には、学校図書館の図書資料・公立図書館からの団体貸し出し・ポスター・新聞などが考えられる。もう1つは、学習内容に関することについて、様々な場面や機会を捉え、話題にすることである。朝会・集会、朝の会、各種便り（学校・学年・学級便り）などが考えられる。

（2）異なる視点から考えて話し合う場面の充実

他者と協同して課題を追究する学習活動の中で、それぞれの考えを出し合って課題への認識を深める場面や、児童自身が物事の判断や決断をするような場面等、児童相互に異なる視点から話し合うことが重要な役割を果たすことが多い。本部会では、異なる視点から考えて話し合う場面における、環境構成、話し合いの方法の2つを充実させることが重要であると考えた。

ア 環境構成の工夫

児童相互に異なる視点から意見交換し、充実した話し合いにするためには、児童が意見や考えを話しやすく、お互いの意見や考えを聞きやすい環境を教師が意図的に構成することが大切である。その際、特に留意すべき点として以下の5つが挙げられる。

- 座席の並べ方（半楕円形、円形、コの字型、長方形などに机を並べる、壁に向かって座るなど）
- 話し合いをする人数
- 話し合いをするメンバー構成（課題別、無作為、クラス全体、対立する2つの意見等）
- 話し合いをする場所
- 話し合いに必要な道具の設置（ペン、ミニホワイトボード、画用紙、付箋、カード等）

イ 話し合いの方法の工夫

異なる視点から考えて話し合う場面を設定するに当たっては、考えを比較して整理できるような表や図などの思考ツールの活用等による情報の可視化、及び多様な考えを引き出し、つなぐ教師の役割について着目した。

（ア）思考ツールの活用等による情報の可視化

異なる視点から考えて話し合う場面では、児童が発する音声のみによる話し合いでは、児童相互の考えを比較したり、関連付けたりするなど、話し合いを通して考えを深めていくことが難しい。このような課題を克服するために、ホワイトボードに児童の考えを書き出したり、思考ツールを用いたりするなど、児童の考えを視覚化することが有効であると考えた。授業のねらい、話し合う内容や場面に応じて、視覚化するための方法を吟味して児童に提示したり、選択させたりすることが重要である。

（イ）多様な考えを引き出し、つなぐ教師の役割

児童主体で話し合う場面においても、教師は児童の考えに耳を傾けるだけでなく、児童の考えを引き出したり、それぞれの考えの共通点や相違点に目を向けられるように児

童の考えをつないだりする役割を担うことが大切である。

例えば、グループでの話し合いをした後、各グループの考えを学級全体で共有する場面では、順番に発表させるのではなく、共通する考えに気付かせたり、異なる考えに焦点を当てたりしてから、教師が意図的に児童を指名して発言を促すことなどが考えられる。

(3) 評価の観点の設定

総合的な学習の時間の評価においては、観点別の学習状況評価を基本としている。評価の観点については、小学校学習指導要領に示す総合的な学習の時間の目標を踏まえ、各学校において具体的に定めた目標、内容に基づいて定める。観点設定の考え方について、「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について（通知）」（平成22年5月11日）では、次のように例示されている。

- | |
|--|
| ① 学習指導要領に示された総合的な学習の時間の目標に基づいた観点の設定 |
| ② 学習指導要領に示された「学習方法に関すること」「自分自身に関すること」「他者や社会との関わりに関すること」などの視点を踏まえて設定した資質や能力及び態度に基づいた観点の設定 |
| ③ 各教科の評価の観点との関連を明確にした観点の設定 |

本分科会では、自ら課題を追究すること、自ら他者と関わり、協力して学習活動に取り組むこと、異なる意見や他者の考えを受け入れ、自分の考えを深められることを目指している。これらを踏まえ、②の資質や能力及び態度に基づいた観点に特に着目し、評価の観点の設定を行った。

子供たちを目指す児童像に近付けるためには、教師が、児童の学習状況からどのような力が身に付いたかを適切に評価し、その結果の分析を踏まえて、さらに意図的な働き掛けをしていくことが必要である。こうした指導と評価の一体化を図るために、目指す児童像を具体化し、次のような評価の観点を設定した。

目指す児童像		資質や能力及び態度	評価の観点
自ら課題を追究する児童		学習方法	課題を追究する力
自ら他者と関わり、協力して学習活動に取り組む児童	➔	他者や社会	他者と関わる力
異なる意見や他者の考えを受け入れ、自分の考えを深める児童		自分自身	自己を見つめる力

(4) 実践事例

実践事例 1 学習対象を「地域の伝統や文化とその継承に力を注ぐ人々」とした実践事例（第4学年）

1 単元名 「車人形を我が町へ」

2 単元目標と評価

(1) 単元の目標

かつて私たちの町で生まれた「車人形」を地域の人に広めようとする活動を通して、地域の伝統や文化の継承に力を注ぐ人々の思いに触れ、地域への愛着の気持ちをもつとともに、自分にできることを考え、実行しようとする。

(2) 評価規準

評価の観点	課題を追究する力	他者と関わる力	自分を見つめる力
単元の評価規準	①人形に興味をもち、三多摩車人形を育てる会の人々と積極的に関わっている。 ②車人形を地域に広めていくために有効な作戦を考えている。	①車人形を地域に広めていくために必要な情報をアンケートやインタビュー等を活用して集めている。 ②車人形を地域に広めるための作戦を考え、準備したり、実行したりしている。	①三多摩車人形を育てる会の人々の思いを聞き、自分なりに感想をもって発言したり、書いたりしている。 ②学習を振り返り、学んだことをこれからの学習や生活に生かそうとする。

3 単元の概要【全25時間】

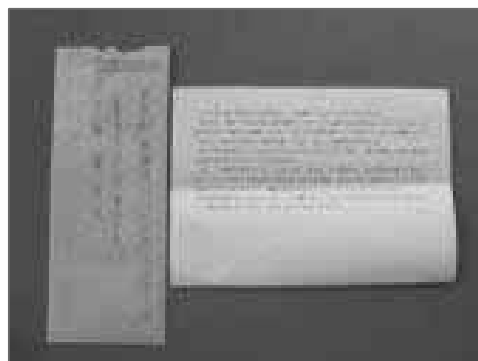
	○主な活動内容 ・具体的な活動	手だて	評価
車人形について知ろう	○「三多摩車人形を育てる会」の方々との交流を通して車人形への興味関心をもつ。【3時間】 ・「三多摩車人形を育てる会」の方々をお招きし、公演を見たり、交流したりする。 ・公演や交流の感想を基に手紙を書く。 ・「三多摩車人形を育てる会」の方の思いや、車人形と地域との関係の現状を知り、今後の活動について考える。 ○車人形について地域の人々はどれだけ知っているか探る。【5時間】 ・計画を立てる。 ・情報収集の方法を選び取り、準備をする。 ・情報収集を行う。(アンケート、インタビュー等) ・集めた情報を整理分析し、今後の活動について考える。	PMI 手紙 意思表示 ネームカード KJ法 ランキング等	課① 自① 他①
車人形を広げよう	○車人形を地域の人々に知ってもらうための方法を考える。【3時間】 ・車人形を地域に広めていくために有効な作戦を考える。 ○車人形を地域の人々に知ってもらうために活動する。【12時間】 ・車人形を地域に広めるための作戦の準備をする。 ・考えた作戦を実行する。 ○活動を振り返る。【2時間】	チャート PMI ランキング等	他② 自②

4 研究主題に迫るための手だて

(1) 意図した学習を効果的に生み出す働き掛けの工夫

ア 児童の関心を引き付ける話題提示

体験を通して車人形への関心が高まったところで、直接触れ合ったゲストティーチャーからの手紙という形で、「私たちの町には車人形が残っていない。」という事実や「もっと地域の人々に知ってほしい。」という思いや願いに児童が触れることができる場を設定し、児童に切実感や疑問をもたせるようにする。



イ 学習履歴の掲示

活動内容や児童の振り返りの言葉をまとめたものを掲示し、同じ学習対象についての認識の違いを客観的に示すことで多様な視点をもてるようにする。また、児童の考えや思いをシェアしイメージを共有することで見通しをもった活動ができるようにする。

(2) 異なる視点から考えて話し合う場面の充実

ア 環境構成の工夫

黒板を前にして全体で意見を共有し話し合いを行う場面で、座席を前方に寄せ、扇形のような体形にする。児童と児童を近付け、黒板を取り囲む場をつくることによって児童の意識を話し合いに集中させ、一体感をもって意見交換できるようにする。



イ 話し合いの方法の工夫

(ア) PMIシート (『関大初等部式 思考力育成法』関西大学初等部[著]より)

PMIシートとは、プラス(PLUS)、マイナス(MINUS)、興味(INTEREST)の視点から評価する方法である。体験活動後の感想を複数の視点から分析して記述する。グループや学級での話し合いにおいて、本思考ツールを活用して意見を交流することで、より多様な思いに触れられるようにする。

(イ) 意思表示ネームカード

話し合いの場面で、各児童が自分の氏名の書かれたネームカードを持ち、それを黒板に貼ることで確実に意思表示できるようにする。中間の意見も表示できるようにし、それぞれの意思表示の理由を聞き、より細かい考えや多様な視点を与えられるようにする。また、多様な意見を聞く中で、考えが変容してきた児童に関しては、途中でネームカードの位置を変えることも許容することで一つ一つの意見に真剣に耳を傾け、思考できるようにする。



5 児童の変容

	A児	B児	C児
児童の 考え	「動きがとても面白かったです。今度、機会があれば体験してみたい。」	「見ているだけでも面白かったけど、今度は体験してみたい。」	「クラスの代表として車人形を体験してすごく楽しかったけど楽しかった。」
	【手だて1】 ○車人形を育てる会の方々の公演及び体験後のPMIを活用した振り返り ○車人形を育てる会の方からの手紙による問題提起 「我が町で生まれた車人形だが、他の町が有名で我が町には残っておらず、受け継ぐ人がいない。私たちの町でも受け継いでいった方がよいのだろうか。」		
児童の 考え	「私たちの町で生まれたのに、他の町の方が有名だなんてもったいない。」	「今の自分たちでは受け継ぐことはできない。無理だと思う。」	「時代の流れは止められない。我が町で受け継ぐのは無理だ。」
	【手だて2】 ○座席配置の工夫と意思表示ネームカードを活用した話し合い 「車人形を地域でも受け継いでいくべきか。今のままでも仕方ないか。」		
児童の 考え	「有名にならなくてもいいから私たちの町でも続けていってほしい。」	「とても難しいけれど、何か受け継ぐ方法があるのなら取り組んでみたい。」	「我が町で受け継ぐのは無理だと思うけど、もう少し体験してから考えたい。」
次時の 活動	「さらに体験して、車人形について知りたい。」「車人形を育てる会の方たちともっと関わろう。」という意欲が高まっていった。		

6 考察

(1) 意図した学習を効果的に生み出す働き掛けの工夫

体験活動後は、「楽しかった。」「面白い。」などの発言が聞かれたが、自分たちの身近なものとしては捉えられていなかった。しかし、車人形を育てる会の方からの手紙で、「我が町には残っておらず、今後どうしていけばいいのだろうか。」という視点を与えられたことで、伝統文化の価値に目を向けるようになった。特に、A児のように「自分たちの地元の伝統を絶やしたくない」「我が町でも受け継いでいくべき」という思いをもつようになった児童も多かった。また、「今のままでも仕方ない」という考えだったB児やC児についても、ただ否定的になるのではなく、実現可能かどうかを真剣に考え、「受け継いでいきたいけれど、今の自分には受け継ぐだけの余裕も技術もないし、大人になってからでは遅すぎる。」などと葛藤しながら考えていた。

(2) 異なる視点から考えて話し合う場面の充実

座席配置を工夫し、互いの距離を近付けたことで、つぶやきが発言として共有されるようになり、話し合いが活発になった。また、意思表示ネームカードを活用したことで自分と対立する意見にも耳を傾けるようになった。B児、C児は受け継ぐことは無理だという立場であったが、みんなの意見を聞くうちに「何か方法があれば取り組んでみたい。」「もう少し体験してから考えたい。」など伝統を受け継ぐ人の気持ちについて考えようとする姿が見られた。

また、車人形の公演、体験後にPMIシートに感想を書き、それをクラスでまとめることで、個々の児童が気付かなかったことや、意識していなかったことを共有し、同じ目的をもつことができた。

実践事例 2 学習対象を「将来への展望との関わりで訪ねてみたい人や機関」とした実践事例（第6学年）

1 単元名 「私の未来設計図」

2 単元目標と評価

(1) 単元の目標

自分自身のよさや可能性と関連させながら自分の就きたい職業について調べたり追究したりする活動を通して、自分の将来を見つめ、夢の実現に向けて今できることを考え、行動できるようにする。

(2) 評価規準

評価の観点	課題を追究する力	他者と関わる力	自分を見つめる力
単元の評価規準	①「私の未来設計図」の作成に興味をもち、学習の計画を立て、自分のよさを見付けている。 ②働く人や働くことに課題意識をもち、興味のある仕事について具体的に調べ、地域の方々の生き方や考え方を知ろうとしている。 ③「私の未来設計図」作成のために必要な情報を整理し、自分のよさを再確認し、自分の将来についてまとめている。	①自分のよさを見付けるために、友達や保護者と積極的に関わっている。 ②身近な大人やゲストティーチャーの話を聞いて、様々な思いや願いをもって働いている人々がいることに気付いている。 ③作成した「私の未来設計図」を保護者やお世話になった方々に発表している。	①友達や保護者と関わりながら、自分のよさを見付けている。 ②身近な大人やゲストティーチャーの話を聞いて、働くことを自分自身と結び付けて考えている。 ③「私の未来設計図」を作成したり、発表したりすることを通して、自分の可能性や将来について強く意識している。

3 単元の概要【全30時間】

	○主な活動内容 ・具体的な活動内容	手だて	評価
これまでもの自分	○自分の分析を行い、自分に合う仕事について考える。【3時間】 ・自分の性格、得意なこと、好きなことなどを捉える。 ・友達や担任から見られている自分を捉える。 ・家族から見られている自分を捉える。自分分析を振り返り、生かしたい自分のよさや伸ばしたい力を考える。	☆友達や家族から自分のよさを伝えてもらい、よさや可能性に改めて気付けるようにする。 ☆学習履歴の掲示を行う。	課① 他① 自①
調べよう、様々な仕事	○自分の興味関心のある職業について調べる。【15時間】 ・興味のある仕事について情報を集めたり、身近な大人や興味のある仕事をしている地域の方々にインタビューしたりして、調べる。 ・調べたことについて中間報告を行う。 ・働く上で大事なことについてダイヤモンドランキングを使って話し合う。 ・改めて興味のある仕事や自分に向いている職業について調べたり、ゲストティーチャー（介護士、お寺の住職）に話を聞いたりして、今、すべきことを考える。	☆職業に関わる本などを掲示しておく。 ☆朝の会などで職業の話題をする。 ☆ダイヤモンドランキングを活用し、話し合いをする。 ☆譜面台に画板を置き、付箋を操作して話し合いができるような場を設定する。	課② 他② 自②
これからの自分	○自分の未来設計図を作り、発表する。【12時間】 ・「私の未来設計図」を作成する。 ・「私の未来設計図」を発表する。	☆選んだ職業が違う児童同士で発表ができるようなグルーピングを行う。	課③ 他③ 自③

4 研究主題に迫るための手だて

(1) 意図した学習を効果的に生み出す働きかけの工夫

ア 児童の関心を惹き付ける話題提示

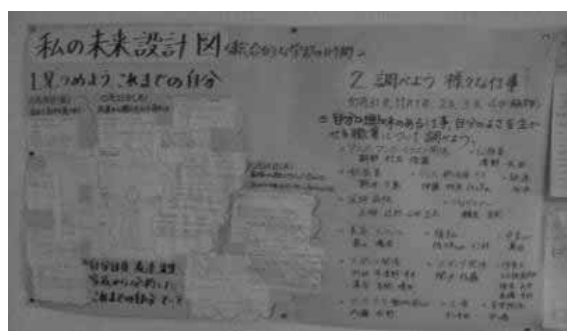
事前に保護者に児童への手紙を依頼し、児童の自己分析の際に活用する。児童が自分では気付かないような自分のよさを手紙という形で示すことで、自分をより理解するための手掛かりにする。

イ ゲストティーチャーとの出会わせ方の工夫

児童がインタビューしたいと思う地域の方々に協力していただき、様々な生き方や働くことの意義等について直接話をしてもらおう。児童が、働くことについてより身近に考えられるようにする。また、地域の方々に会うタイミングも吟味し、児童の関心が高まったところを見計らって出会わせる場を設定する。

ウ 学習履歴の掲示

活動内容や児童の感想などが分かる学習掲示を行うことで、活動を振り返ったり、活動の見通しをもったりできるようにする。



エ 関連資料の設置

教室内の児童が目にする場所に、「13才のハローワークマップ」等の職業に関する本をさりげなく置いておくことで、児童の関心を自然と高めていくようにする。

オ 朝の会等における話題提供

朝の会等で職業に関する話を取り上げるなどして、職業や将来についての児童の意識を高めていくようにする。

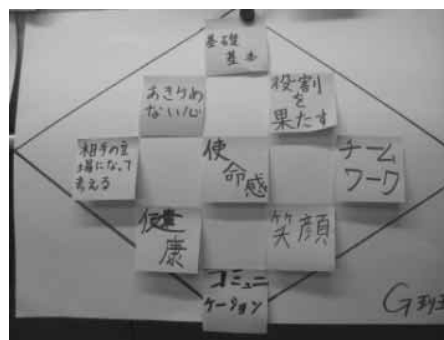
(2) 異なる視点から考える場面の充実

ア 環境構成の工夫

話し合いの際には、選んだ職業が異なる児童同士でグループをつくり、様々な職業の中の共通点や、働く上で大事なことなどについて話し合えるようにする。また、グループごとに譜面台の上に小さいホワイトボードや画板を置き、児童が話し合ったり情報を分析したりしやすい場を設定する。全体で話し合いを行う際には、黒板の前に全児童を集め、一体感をもって話し合いができるようにする。

イ 話し合いの方法の工夫

「働く上で大事なこと」について話し合う際には、ダイヤモンドランキングで情報を整理し、順位をつけて分析を行う。敢えて順位をつけることで、児童同士の意見が交わされ、話し合いが盛り上がるようにする。全体で話し合いを行う際には、共通点や相違点に気付かせ、意図的に異なる視点に目が向くような意見の取り上げ方をし、児童の考えが深まるようにする。



5 児童の変容

	A児	B児	C児
	<p>【手だて1】 ○児童一人ひとりが働く上で大事だと思うことを事前に2つ選んでおく。理由とともに付箋に書いておく。</p>		
児童の考え	<p>○「あきらめない心」あきらめないで、イラストレーターとしてよいものを描きたいと思った。</p> <p>○「基礎基本」仕事をやる上で、基礎を大事にしたらいいものが描けると思うから。</p>	<p>○「あいさつ」どの国の人でもあいさつをする。どんな人でもあいさつはできるし、あいさつをされると心が和むから。</p> <p>○「好奇心」何事にも好奇心をもつことは大事なことで、いろいろ発見できるから。</p>	<p>○「思いやり」新体操のコーチをする上では、子供のことも考えて、演技を作るので、子供の個性に合わせて技や構成を考えるから。</p> <p>○「明るさ」新体操のコーチは、子供たちに笑顔やあいさつなどを教えてくれる。そうすると、子供たちは、試合で明るく演技ができるから。</p>
	<p>【手だて2】 ○話し合いの際には、選んだ職業が異なる児童同士のグループで話し合わせる。 ○グループごとに譜面台上に画板と画用紙を置き、児童が付箋を操作しながら話しやすい場を設定する。 ○話し合う際にはダイヤモンドランキングで情報を整理し、順位をつけて分析を行う。 ○全体で話し合いを行う際には、黒板の前に児童を集め、一体感をもって話し合いができるようにする。 ○全体で話し合いを行う際には、共通点や相違点に気付かせ、意図的に異なる視点に目が向くような意見を引き出し、児童の考えが深まるようにする。</p>		
児童の考え	<p>「責任」が上の方にある班が多かったので、仕事＝責任とイメージする人が多かったのだと思った。</p> <p>また、「チームワーク」も多かったので、仕事をするときは、「責任」をもつことも大事だけれど、チームで協力することも大事なのだと思った。</p>	<p>ダイヤモンドランキングをやって、本当に大切なことが分かった。みんなそれぞれの心得があるから、その心得をもち続けて仕事をするのが一番かなと思う。今からできることもたくさんあるので、委員会の仕事やクラブの役割をしっかりと果たしたい。</p>	<p>学校生活の中では「責任感」や「チームワーク」もすごく必要だから、日々の生活でも大切にしなければいけないことと思う。自分自身は「責任感」を大事にしたい。学芸会でも一人ひとり役が決まっているわけだから、一人がしっかり自分の役になり切ってやらないと劇が台無しになってしまう。だから「責任感」は大事で、それは仕事でも同じだと思う。</p>
活動の	<p>実際に働いている地域の方に「働く上で大事なこと」のダイヤモンドランキングを作ってもらった。自分たちのものと比べ、確かめた。</p>		

6 考察

(1) 意図した学習を効果的に生み出す働きかけの工夫

単元に関連する本を教室に置いたり、朝の会等で話題にしたりすることで、自然と児童の関心が自分の将来や職業へ向くようになっていった。実際に働く地域の方々にインタビューや手紙等で質問に答えてもらう児童も多かった。特にB児は、出版社に勤める方に実際に手紙を出し、情報収集を行ったことで、出版関係の職業により興味・関心をもった。そして、手紙で出版社の方が大事にしていると教えてくれた「あいさつ」と「好奇心」を、自分自身も働く上で大切なこととして挙げていた。これは、実際に興味のある職業の大人に手紙を出し、返事をもらうという関わりの中で、地域の大人を身近に感じ、憧れの職業をより自分の将来と結び付けて考えられたためでないかと思われる。

また、ゲストティーチャー（介護士、お寺の住職）に直接話を聞く機会も設けた。その際には、ゲストティーチャーと事前に打合わせをし、児童に手紙が届くように依頼したり、児童に伝えてもらいたいことを話に盛り込んでもらったりした。イラストレーターを目指すA児は、ゲストティーチャーの話聞き、様々な職業の中に共通点があることに気付くことができた。A児は、地域の方、働く方から教えてもらった大切なことを自分の興味のある職業や将来に関連付けて、考えを深めることができた。事前に打合わせをし、伝えてもらうべきことを明確にしておいたことで、働く上で、どのような仕事にも共通して大事なことがあるという教師の意図した気付きにつながったと言える。



(2) 異なる視点から考える場面の充実

話し合いを行う際には、選んだ職業が異なる児童同士で発表を行ったり、大事なことについて考えたりすることで、児童は多様な考えに触れることができた。また、ダイヤモンドランキングなどの思考ツールを効果的に活用することで、話し合いが活性化し、自分の考えを深められた児童も多かった。学級全体で話し合いを行う際も、児童を黒板の前に集め、一体感をもたせられるようにしたことで、児童同士の会話や意見交換が活発化した。C児は、話し合いを行う前は「思いやり」や「明るさ」を働く上で大事なこととして考えていたが、グループや全体での話し合いを通して、「責任」や「チームワーク」も大事であると考えが変わり、さらに他の児童の意見を聞いて、それらは日々の生活の中でも大切なものだという事に気付くことができた。このように、異なる視点から考える場面を充実させたことで、児童は様々な意見を交換し、働くことを身近に感じながら、将来のために今できることは何かを考えていくようになったと言える。



VII 研究の成果と課題

1 研究の成果

(1) 意図した学習を効果的に生み出す教師の働き掛けの工夫について

ア 掲示物、図書資料、学級指導での話題提示などを通して、児童が異なる視点から考えられるよう意図的に働きかけることで、学習を発展させるような異なる視点に自然に気付かせることができた。そのため、児童が協同して課題を追究していく際に、多面的に物事を考える素地となり、効果的な学習を生み出すことができた。

イ 児童が多様な視点で物事を考えられるように教師が意識して指導に当たったことで、活動イメージを具体的にもつことができた。それにより、掲示物や図書資料、話題提示など、児童の活動に即した効果的な指導の工夫を行うことができ、児童の探究活動をより充実させることができた。

ウ ゲストティーチャーとの出会いや、協力者からの手紙などを児童に示すタイミングや内容などを十分に吟味することで、児童が主体的に学習を進めることができた。

(2) 異なる視点から考えて話し合う場面の充実について

ア 話し合いのメンバー構成や、場の設定を意図的に行ったことで、児童の話し合いが活性化され、個々だけでなく集団としての考えにも深まりが見られた。

イ 授業のねらいに合わせた思考ツールを用いて話し合うことで、自分の考えを明確にして伝えたり、異なる視点から考えることを促したりすることができた。

ウ 話し合い場面を充実させるために、教師が児童の考えを引き出し、異なる意見をつなぐ役割を担うことの重要性に気づき、その具体的な手だても検証することができた。

2 研究の課題

(1) 意図した学習を効果的に生み出す教師の働き掛けの工夫について

ア 成果(1)のイに記したように、本研究を通して教材準備の焦点化が図れたが、より多くの教員がすぐ実践できるよう、一般化するまでには至っていない。

イ 成果(2)のアに記したように、教師が働きかけた異なる視点によって、思考を深める児童がいる一方で、視点を十分に捉えられず、深く思考することが難しい児童もいた。

(2) 異なる視点から考えて話し合う場面の充実について

ア 話し合う場面の必然性を児童自身が感じられるようにするための手立てを、さらに研究する必要がある。

3 今後に向けて

意図した学習を効果的に生み出すために環境づくりやゲストティーチャー等との関わりを工夫したことで、児童が多角的に考えたり、主体的に学習を進めたりする姿が見られ、探究的な学習の質を高めることができた。ただ、児童の主体性を損なわないよう意図的な働き掛けを行うには、教師の十分な児童理解と配慮が必要である。今後さらに実践を重ね、具体的な手法や児童の見取りの方法について、一般化を目指した研究を進めていく必要がある。

また、異なる視点から考えて話し合う場面の工夫として、様々な場の設定や話し合いの方法を取り入れたことで、話し合いが深まり、探究的な学習の質を高めることができた。ただ、児童自身がそれらの手法を場面に応じて選び取るようにするには、総合的な学習の時間以外の他教科・領域などにおいて十分に経験させる必要がある。さらに、必然性のある話し合いになるように、単元や授業の流れを工夫したり、児童の考えをつなぎながら学習を進める教師の技術を向上させたりすることが必要である。

今後は、本研究の成果を生かして自身の授業力を高めるとともに、自校における総合的な学習の時間の充実に向けて貢献していく。

平成25年度 教育研究員名簿

小学校

生活・総合的な学習の時間

	地 区	学 校 名	職 名	氏 名
生活	文京区	文京区立湯島小学校	主任教諭	○栗原加代子
	町田市	町田市立小山小学校	教諭	福嶋 由歩
総合的な学習の時間	新宿区	新宿区立大久保小学校	教諭	兼元由香利
	練馬区	練馬区立南町小学校	教諭	筒井 明以
	練馬区	練馬区立石神井小学校	教諭	◎藤本 道生
	昭島市	昭島市立つつじが丘南小学校	主幹教諭	下野 剛
	多摩市	多摩市立豊ヶ丘小学校	主幹教諭	井戸しのぶ

◎世話人 ○副世話人

[担当] 東京都教育庁指導部指導企画課

指導主事 千葉 かおり

平成25年度
教育研究員研究報告書

小学校・生活・総合的な学習の時間

東京都教育委員会印刷物登録

平成25年度第193号

平成26年 3月

編集・発行 東京都教育庁指導部指導企画課
所在地 東京都新宿区西新宿二丁目8番1号
電話番号 (03) 5320-6836
印刷会社 昭和商事株式会社